



教員展

〔学科教員による作品展〕

【プラザ展】

会期 2023年7月28日(金)～7月30日(日) 10:00～18:00

場所 四国大学交流プラザ3Fキャンパスギャラリー

(徳島市寺島本町西2丁目35-8 電話088-602-4858)

【学内展】

会期 2023年7月31日(月)～8月19日(土) 9:00～18:00

(但し、8月5・6日、11～16日は休館)

場所 四国大学書道文化館1Fギャラリー

(題字揮毫：辻 尚子、背景：吉野川橋)

ごあいさつ

四国大学文学部書道文化学科は、「書道に親しむ」から「書道を楽しむ」、さらに「書道を活かす」へと発展させ、書道文化の専門的探求を目指すユニークな学科です。

書道文化学科の学生たちは、書道の「技術」「歴史」「理論」などを探求していく中で書道文化を理解し、また書の作品制作を通して自己を表現することを学ぶと共に、新たなことを創造する発想力を身につけていきます。学生が身につけた力は書道以外の分野でも応用範囲が広く、卒業後には様々な職業の中でそれを活かして活躍しています。

私たち教員も、教育と研究の責務を果たすべく日々取り組んでいます。この展覧会は、学科の専任と非常勤の教員が書法研究発表の場として年一回開催し、今年で37回目を迎えました。時期をずらして2会場で開催します。なにとぞ御高覧のうえ、御教示賜りますようお願い申し上げます。

(出品者一同)

出品目録

太田 剛 (仙鳩) (教授)

「鳳舞」(「李嶠詩」の語)
ナスカの地上絵「鯨」
「ようかんという名の猫」(Kohrinの詩)
高村光太郎の言葉(「書について」)
『茶の本』より(岡倉天心)

辻 尚子 (紅雲) (教授)

王建詩
「百泉響」
『梁塵秘抄』より(後白河法皇)
杜牧詩

森上 洋光 (洋光) (教授)

「敬恭」
臨「大克鼎銘」

田ノ岡 大雄 (講師)

「鷺」(斎藤茂吉の歌)
「鳥獣魚介」(斎藤茂吉の歌)
「雨蛙」(斎藤茂吉の歌)
「鴉」(斎藤茂吉の歌)

渡邊 周一 (星舫) (講師)

『論衡』語二種
「長厚清修 僕區之濃」(「趙朴」・『左伝』)
「爲淵馭魚 義道」(『孟子』『礼記』)
「雕琢刻鏤 捐軀濟難」(「淮南子」・『三国志』)
『論語』語二種

黒田 賢一 (客員教授)

「初秋の景」(松尾芭蕉の句)

上田 普 (非常勤講師)

「AR天の海」(柿本人麻呂の歌)

鹿倉 壮史 (碩斎) (非常勤講師)

「晦藏」

黒木 知之 (非常勤講師)

「芝仙延年図」

小竹 正高 (非常勤講師)

「紫陽花」(木村弓子の句)

松村 茂樹 (非常勤講師)

「啓功先生の書法」より(自作)



〒771-1192 徳島市応神町古川

四国大学

学際融合研究所 言語文化研究部門

TEL 088(665)1300

FAX 088(665)8037

ホームページ

<https://www.shikoku-u.ac.jp/education/gakusai-yugo-labo/lc-dep/>

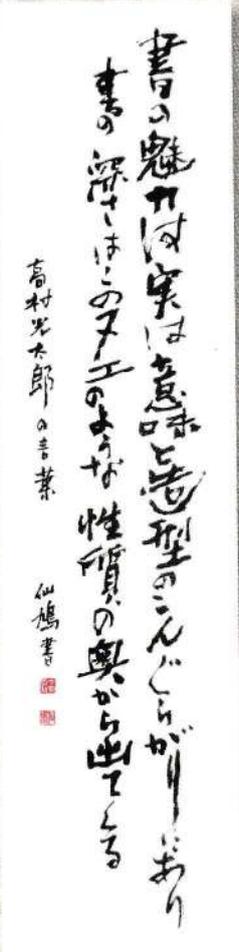
太田 剛 (仙鳩)

「鳳舞」



144×76

「高村光太郎の言葉」



137×35

「ようかんという名の猫」

街の騒めきの中で躑躅
 細く光る三日月の空に
 小栗いて
 突如足元に滑り
 やさしい毛並み
 何故か明日を
 踏み出せる気がしてくる
 そんな一時
 ようかんの猫 Kohrin詩 仙鳩書

90×52

「ナスカの地上絵 鯨」



72×75

辻つじ

尚たか子こ
(紅雲こううん)

杜牧詩

滿眼青山未得過 鏡中無那鬢絲何 祇言旋老轉無事 欲到中年事更多
曉迎秋露一枝新 不占園中最上春 桃李無言又何在 向風偏笑豔陽人

滿眼青山未得過 鏡中無那鬢絲何
祇言旋老轉無事 欲到中年事更多
曉迎秋露一枝新 不占園中最上春
桃李無言又何在 向風偏笑豔陽人

森^{もり}

上^{かみ}

洋^{ひろ}

光^{みつ}

(洋光^{ようこう})

「敬恭」

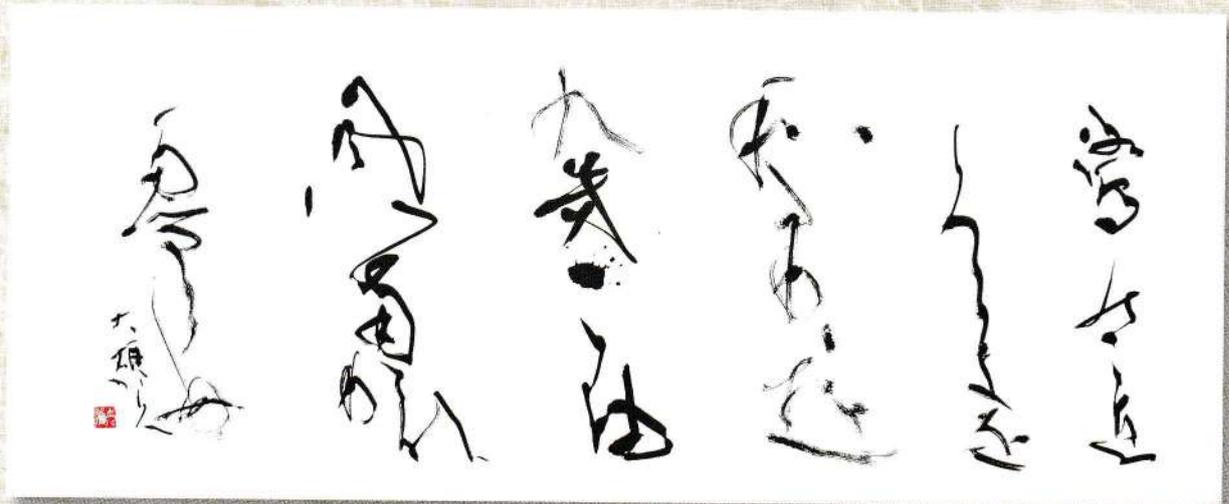


240×90

たのおか
田ノ岡 だい
雄 ゆう

「鷺」

(斎藤茂吉の歌)



70×175

鷺のこゑ
くらきを
わたりゆく
聞こゆ
風は南となり
たるらしも

渡わた

邊なべ

周しゅう

一いち

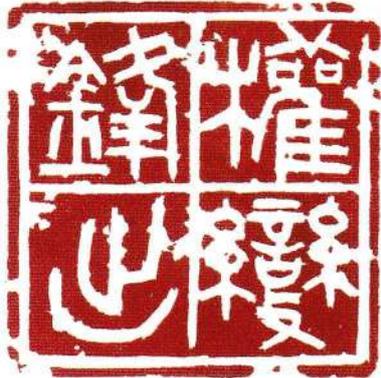
(星舫せいぼう)

「天道難知」



6×6

「權變鋒出」



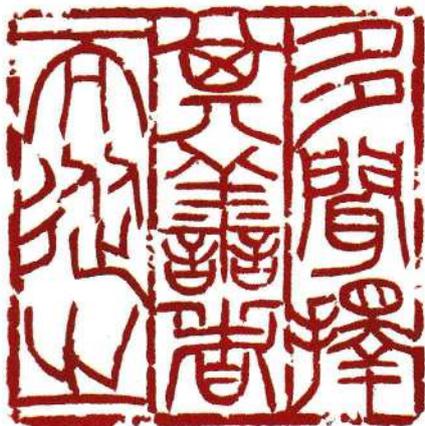
5.5×5.5

「雕琢刻鏤」



5.5×5

「多聞擇其善者而從之」



6×6

黒^{くろ}
田^だ
賢^{けん}
一^{いち}

「初秋の景」(松尾芭蕉の句)



本紙 120×90

はつ秋や海も
青田の一みどり

上^{うえ}
田^た
普^{ひろし}

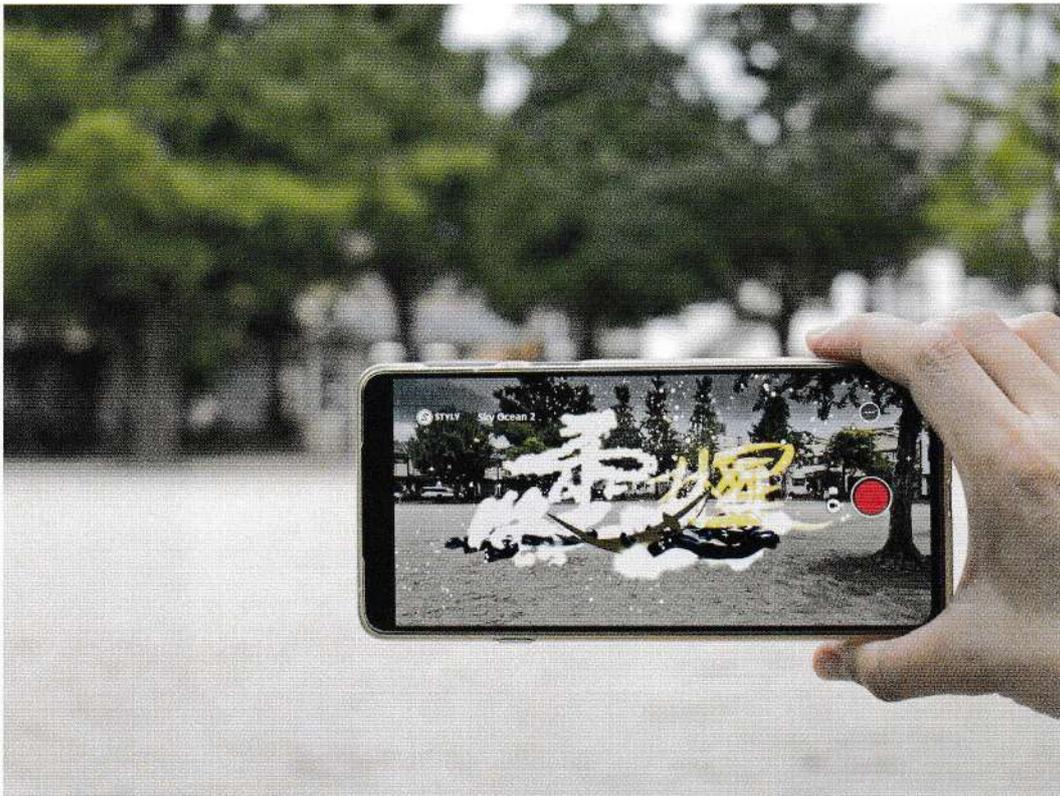
「AR天の海」
(柿本人麻呂の歌)



Styly AR
Night sky ocean



youtube
VR天の海



天の海に 雲の波立ち
月の船 星の林に
漕ぎ隠る見ゆ

QRコードを読み込んで
頂き、動画はyoutubeで
(ちなみに音楽は私のバン
ドの演奏です。ハーモニカ
が私)、
AR作品はSTYLYの
アプリをダウンロードして
楽しんで下さい。

鹿か
倉くら
壯たけ
史し
(碩齋せきさい)

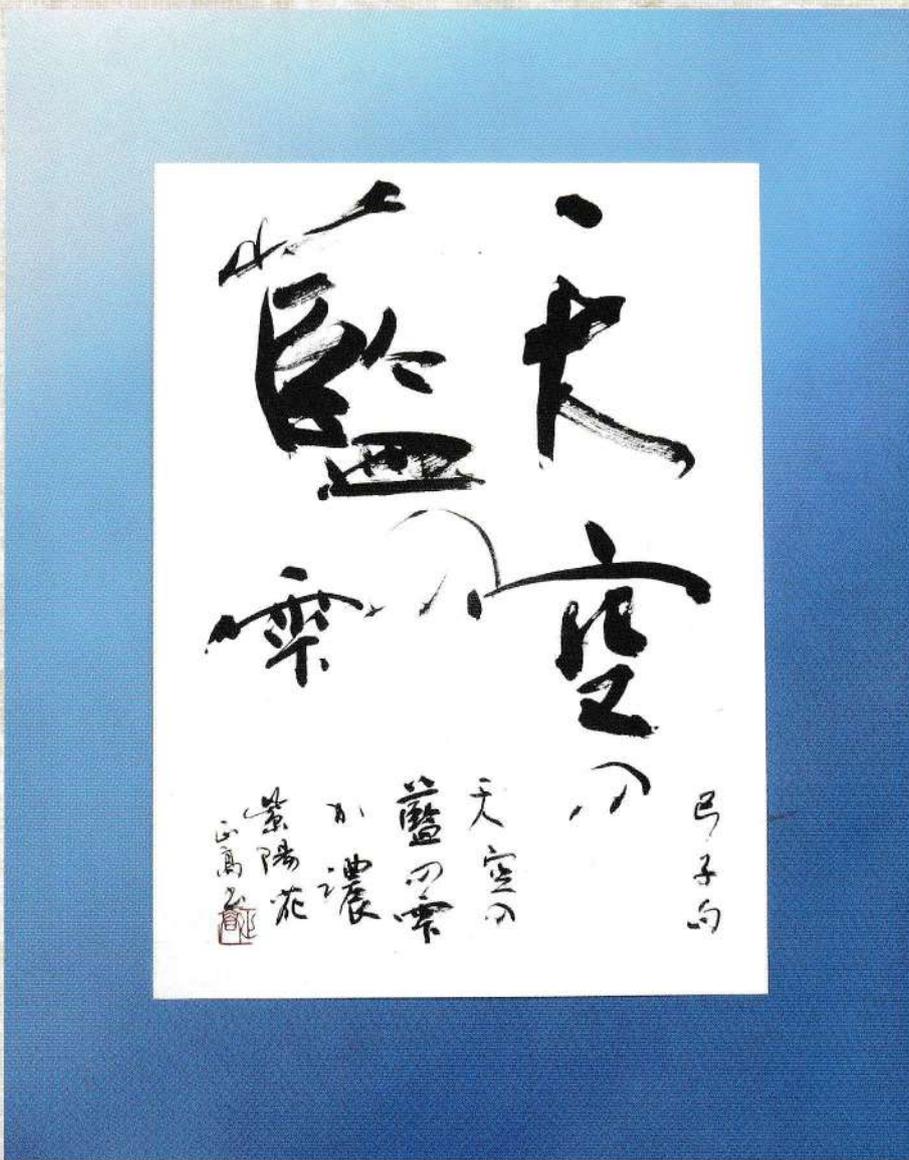
「晦蔵」



本紙 20×30

小竹正高

「紫陽花」(木村弓子の句)



本紙 35×24

天空の
藍の葉が
濃紫陽花

松^{まつ}
村^{むら}
茂^{しげ}
樹^き

「啓功先生の書法」より

啓功先生の書法は、このように洞察力によって、
書の本質を見極めた上で、その本質を具え
た墨跡を学んで打ち立てられた。書法家は
書法家である前になぜ伝統的学問を修め
た者でなければならぬのか。それは学
者でなければ書の本質を見極める洞察力
が具わらず、ひいては本質を具えた書を
作れないからだ。

啓功先生の書法より

松村茂樹并書

32.5×22.5

啓功先生の書法は、このような洞察力によって、書の本質を見極めた上で、その本質を具えた墨跡を学んで、打ち立てられた。書法家は書法家である前になぜ伝統的学問を修めた者でなければならぬのか。それは、学者でなければ書の本質を見極める洞察力が具わらず、ひいては本質を具えた書を作れないからだ。

【阿波ゆかりの書人作品 紙上展】

四国大学 書道文化センターでは、近世から近代にかけての阿波と淡路に関係の深い書人の作品を中心に収集しています。この時代の地方の書道を担った学者・僧侶・国学者は、既に名前を忘れられていることの方が多いのですが、書の技術は高く個性的で、近世・近代の日本書道史を考える際の重要な資料になります。また、その流れは現代のその地域の人々の書く書の基礎的な部分を形成していると考えられます。行草の漢文や変体仮名の作品が多く、現代人には読みにくく、経年劣化も目立つため、ともすれば、世代交代の折に廃棄される危険があります。翻刻はまだ間に合っておりませんが、教員展の際に、書人の履歴と共にその一部を展示し、地域の皆様や学生達にも鑑賞をしていただくことで、書人の名前を記憶に留め、次代に伝えていきたいと考えています。

奥田尚斎 おくだしやさい 享保十四（一七二九）一八〇七 七十九歳

姫路の人。阿波藩儒として有名な那波魯堂の弟。名は元継、字は志季、通称は尚斎、別号は松斎・仙樓・拙古。本姓は那波で奥田は妻の姓。兄と共に京都に遊学し、のち大阪で朱子学を教授した。特に『春秋』を好み、『左伝』について創意するところが多かった。詩書が得意で、徳島の眉山山麓にある兄の墓碑銘を撰文している。

妻茲情雪好橋半負再々帟乃
引山良色 藐字 佐上 元

類画
元継并書

玉潤 ぎよくかん 明和八〜安政三（一七七二〜一八五六）八十六歳

京都の人。名は元寔、号は半偈斎。十六歳で詩を岡魯庵に、文を大興梅莊に学ぶ。二十歳で備中の大雲老師、武州の俄山和尚、京都の隠山禪師の下で修業した。鍊修十余年、徳島助任の興禪寺に来て主僧となり、僧に文学を教えた。「禪林の双壁」と讃えられ、全国的に「阿波禪」として有名になり、集まる僧は数百人を数えた。文名も高く、詩文・書をよくし、琴を弾じた。特に七言律詩に巧みで、古賀精里・篠崎小竹・斎藤竹堂らと親交があった。

槐夏百軒夜も流經囊編月華昇
幽情の救飛紙没為減書窓一匙鏡
五夜事 六外

柴 しば 秋邨 しゅうそん 文政十三〜明治四（一八三〇〜七一）四十二歳

徳島の人。幼名は卯吉、名は維卯、字は緑野、通称は新蔵・六郎、別号は繭山・東野・帰樸・紅寶・秋孫など。太物商、阿賀屋清左衛門の子。四歳で父に死別、八歳で丁稚奉公に出るが読書好きで、医師河野弘に見出され門弟になったが、数年後、新居水竹に入門し儒学を学んだ。十六歳で上京し大沼枕山の下僕となり四年間学ぶが、帰郷途中、大阪で藤井藍田を知り援助を受け広瀬旭莊に入門し塾頭になった。同時に緒方洪庵にも洋学を学んだ。安政四年（一八五七）には豊後日田の広瀬淡窓に学び、広瀬青邨・平野五岳・長三洲とも交流し、咸宜園塾頭となった。文久三年（一八六三）、帰郷し塾を開いて教授した。藩にも起用され儒学と洋学を教えた。詩書画に優れ、また酒を愛した。しかし明治三年の庚午事変により三年間の禁錮に処せられ、病没した。

夕風瀏雨江竹北江聲
根有遲也乎猶留晨霞清

秋邨也

こすぎすぎむら
小杉楹邨

天保五〜明治四十三（一八三四〜一九一〇）七十七歳

徳島の人。初名は五郎、のち楹邨、屋号は杉園。藩の中老西尾志摩安福の家臣明真の子。十二歳で寺島学問所で儒学を、父に和歌・物語を、池辺真榛と本居内遠に国学を学んだ。二十四歳で江戸の紀伊藩古学館で国文・和歌を学び、村田春野・小中村清矩・久米幹文らと親交した。文久三年（一八六三）、尊皇攘夷を主張したために西尾家に幽閉後、城下を追われ鳴門の北泊で塾を開いた。維新後には徳島の役人を経て新政府に入り、教部省社寺係・内務省社寺係・参謀本部・文部省・帝国博物館歴史美術部・宮内省御歌所・東京美術学校教授・東大文科大學講師・国語伝習所長・皇室博物館評議員などを歴任した。大師流の能書家で、有職故実に通じ、奈良の正倉院・法隆寺の研究に詳しかった。全国を歩き筆写した古記・古文書集は貴重な文献である。